

に並べて、上を半分位入れて堅く踏み付け、更に上を充分寄せて堅く踏み付けます。
1人1日の作業は1,500本〜2,000本位であります。

- (4) 挿付と同時に日覆をとりつけます。日覆は今迄まき付床に使用したものを2枚重ねて横にかぶせ、両端を床の両側に垂れ下けて、側方からも強い光線が直射せぬ様に致します。麦稈で藪んで作れば価格も安いし、虫害の虞合も下度宜しい株であります。
- (5) 四月から五月にかけては空気が乾燥する日が続きますので、こんな時には隔日に加露で灌水をします。又六月中下旬と八月に中旬に追肥として硫酸を反当り量位づつ施用します。日覆は九月中下旬にはとり除いて、活着した苗に充分日光を当て、寒害にかゝらぬ様に致します。
- (6) ヒ)キ挿付は日覆をする際、床地が陰湿になつてネキリムシの害が発生し易いから挿付に当つてはナフタリン、硫酸粉末を比中に撒布します。又イザリヤコガネ菌を反当り量位は理想的であります。
- (7) 挿付床は、蒸り気のある箇所や、まゝ前に相当強い壁のある所は、其處挿付けてもよいが、盛上したり地盤が深かったり、稍乾燥性の所は地突きで突き固めてから挿付けると宜しい株であります。

アカシアモリシマの養苗

特に発芽促進について……予報

福岡縣農林試験場 中島 亮 諭

アカシアモリシマは樹皮に多量のタンニンを含むこと、材はパルプ資材⁽¹⁾或は薪材材になり、しかも幼時の生長が極めて速いから造林価値が非常に高いものである。

しかし本樹造林の難点は山出し苗の活着の困難なことで、これは細根が少いこと、今一つは葉面からの飛散が大であることに因つて思われる。

細根の多い苗を育成するために対策をする必要があるため種子をなるべく一斉に発芽させる爲に試験を行ったのでここに報告する。

① 種子の活打検定

硬実であるこの種子を発芽促進してその初根を確むるために過酸化酵素をクアヤク精の反応によつて検出したところ92.9%〜98%の反応を示したので大体95%程度活力があるものと見られた。

② 硬実保育率

45日間水の中に入れて膨大した種子の数は次の通りで、クス、シラハギ等に較べて着

しく脱皮の多いことが認められる。

	モリシマ(完熟)	モリシマ(未熟)	ク ス	シラハギ	イタチハギ
供試粒数	200	200	100	100	100
膨大粒数	3(1+2)	7(6+1)	19	17	86

③ 発芽促進

次の5処理を行って比較した。供試粒数は500粒。1単位を100粒とし、処理は1単位毎に行なった。処理後シャーレに入れ、室内に静置して水中にて発芽するのを調査した。

- イ. 熱湯処理 80°C 10分 実際施行の温度は各組共 78~82° の間であった。
 ロ. " " 5分 " 79~81°
 ハ. 稀硫酸処理 80°C 5分 水9. 硫酸1 の300のものに浸す 78~81.5°
 ニ. 硫酸発熱処理 3分 120°C の水(22°)に種子を浸し稀硫酸4.0ccを注入した。
 max. 81~83° 81~82°(1分) 74~75°(3分)
 ホ. 硫酸稀薄液処理 80°C 3分 水3. 硫酸1 の割合の液30°Cのものに種子を入れて処理した。79~82°

以上処理した種子の発芽状況は次の通りである。

発芽率 % 最高	処理別	熱湯処理		稀硫酸処理	硫酸発熱処理	硫酸稀薄液処理
		80°C 10分	80°C 5分	80°C 5分	3分	80°C 3分
発芽率 %	完熟	87	86	90	80	88
	未熟	45	61	72	86	63
	計	67	74	81	83	75
発芽率 %	完熟	14	14	13	9	10
	未熟	15	16	13	10	15
	計	14	15	13	10	12
発芽率 %	完熟	77~77	58~95	81~95	40~95	85~93
	未熟	8~85	29~89	38~89	82~94	26~95

結 び

以上の結果から大体次の傾向があることが言えろと述ぶ。

- 5処理の間には発芽率だけをみる場合は老だし甲乙は認められない。
- 硫酸を耐えて処理すれば熱湯のみの場合よりも発芽能力をばやめる。殊に硫酸発熱処理を行えば着るしい。

(1) 農芸化学雑談 18巻(1942), 20巻(1944) 志方 録